
仮面ライダー剣

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー剣

【Nコード】

N8258A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

渋谷隕石。皆さんは覚えているだろうか。隕石の影響で渋谷が崩壊し、ワームと言う地球外生命体が人類を脅かした大事件……

プロローグ（前書き）

タイトルの剣は「ツルギ」と読みます。
「ブレイド」ではありません。

プロローグ

渋谷隕石。

皆さんは覚えているだろうか。

隕石の影響で渋谷が崩壊し、ワームと言う地球外生命体が人類を脅かした大事件の事を・・・。

この事件は、35年前にZECTが制作した旧武装システム「マスキドライダー」を装備する一人の男「天道 総司^{カフト}」のおかげで治まった・・・かに見えた。

そう、地球は今、35年前に滅んだワームと言う地球外生命体の生き残りである「クロン」によって侵略されつつある。

そこで人類は、「SUPER ZECT^{スーパーゼクト}」を結成。

しかし、クロンの持つクロックアップの10倍の速度の「ハイパークロックアップ」、人に乗り移る「憑依^{ひょうい}」と言う特殊能力には為す術も無かった。

クロンは片っ端から憑依し、次々と人々をクロン化させて行った。

もはや最後の希望は、完成間もない最新鋭の武装システム「マスキドライダーシステム」のみであった。

これを装備し、使いこなせる者が現れれば、SUPER ZECTはクロンに対抗しうる力を手に入れられるのだ。

剣（ツルギ）（前書き）

つまらなかったら「つまらない」とハッキリコメントして下さい。
そうしたら考えますんで。

剣（ツルギ）

渋谷某所。

「うわあー！」

と、クロンを相手にガタツクバルカンを打ち込む旧マスクドライダーシステム・ガタツク。

ガタツクの装備者は「加賀美 新」と言う旧ZECTの隊員だ。彼は、俺の爺さん「天道 総司」と共にワームと戦った英雄だ。だが、そんな彼でも、クロンを足止めするだけで精一杯だった。ガタツクはガタツクバルカンを連射しながら、

「新マスクドライダーシステムはまだですか！？」

と、旧ZECTの隊員である「岬 結月」に言う。

岬は、

「もうすぐ田所さんが持ってくるわ！それまで持ちこたえて！」と、ガタツクに無線で伝えた。

ガタツクは、岬の言葉を信じ、田所の到着を待った。

そこへ、

「手を貸してやる。」

と、カブト・ライダーフォームが現れた。

「天道！？お前、過去に行ったんじゃない？！」

「42年前から戻って来たんだ。黙って戦え。」

カブトはそう言っ、サイドバックルに付いているハイパーゼクターの角を倒し、ハイパーフォームに容姿を変えた。

「加賀美、お前もキャストオフしろ。」

「解った！」

と、ガタツクは連射をやめ、キャストオフしてライダーフォームになった。

「加賀美、コイツをお前にやる。」

カブトは、カブトがサイドバックルに装着してるものと全く同じハ

イパーゼクターをガタツクに渡した。

ガタツクはそれを受け取り、サイドバックルに装着すると、直ぐにハイパーフォームへと容姿を変えた。

「加賀美、ハイパークロックアップだ。」

カブトはそう言い、ハイパーゼクターのボタンを押してハイパークロックアップを発動させた。

それに続き、加賀美もハイパークロックアップを発動。

その頃、当の俺は爺さんの死亡を知らされ、渋谷に向かっていた。旧ZECT曰く、クロンとの戦いで爆発して死んだらしい。

要するに、遺体は無いと言う事だ。

それより、俺はとっても危険な状況に遭遇している。

「何だよあの人間！？不死身か！？」

俺は、怖くなって逃げ出した。

だが、その不死身人間は容赦無く追っ掛けて来る。

「糞！あんなのとっつかまったら、確実に殺される！」

実は、後から追いかけてくる不死身人間は、最近世間を脅かしてるクロンが乗り移っている。

クロンに肉体を乗っ取られたものは、肉体がクロンと同化してしまい、死んでしまうのだ。

その後はクロンが肉体の支配権を握る。

つまり、クロンは死体を動かしてると言う事だ。

取り敢えず俺は、目に入った廃墟と化した建物に隠れ、やり過ごす事にした。

クロンは、俺が建物に入った事に気付かず、そのまま素通りしていった。

「ふう。」

と、俺はため息を吐いた。

「たっく、この世界はどうなってんだ？」

と、俺は一人呟く。

まあ、不死身人間は巻いた事だし、渋谷へと向かいますか。

と、呑気な事を考えながら廃墟を出た。
すると、

「逃げ・・・ろ・・・。」

と、老人の声が聞こえた。

俺が振り向くと、そこには肩を押さえた血まみれの男が立っていた。

「大丈夫か爺さん？」

俺は老人に声を掛ける。

「俺に近付くな・・・。」

俺は、俺の中にはクロンがいる・・・。

俺はもうすぐクロン化する。そうなる前に、俺から離れろ・・・。」

と、老人は言う。

成る程、クロンには潜伏期間があるのか。

「そんな事言われたって、けが人をほっとけるかよ！」

俺はこう見えても、傷ついたものがあると放っておけない性分なのだ。

「そうだ、ついでに・・・コイツを渡して欲しい。」

老人は、SUPER ZECTが作り上げた最新鋭の武装システム

「マスクドライダーシステム」のベルトを、俺に渡した。

老人が渡したベルトは、555（ファイズ）のベルトの様な格好をしていた。

「それを、黒崎 健一と言う・・・男に渡して欲しい・・・。
頼む・・・。」

老人はそう言うのと、その場に倒れた。

それから暫くすると、老人は起きあがって真っ直ぐ立った。
どこもいたそうにしていない。

「フフフフ。人間の身体！人間の身体を手に入れたぞ！」

老人は言った。

どうやらクロン化したらしい。

と言う事は、俺が此処にいてはやばいんじゃないか？

「何だお前は？殺されてえのか？」

と、老人は言った。

やばい！

俺はその場から逃げようと、後を振り向いた。

しかし、目の前にはさっきの老人が立っていた。

「んあ？」

俺は後を見たが、誰もいなかった。

「おめえ、どうやったんだ？」

と、老人・・・いや、クロンに聞いた。

「お前も俺達の仲間になれば出来るさ。」

と、クロン。

俺は逃げだそうとした。

けど、足がすくんで動かない・・・。

クロンは目の前に迫って来ていた。

俺はそのまま地べたにしゃがみ込み、

「来るな！」

と、ベルトで振り払った。

すると、ベルトが一瞬だけ発光し、クロンを弾き飛ばした。

「な、何だ？」

俺は呟いた。

俺は試しに、ソイツを腰に巻いて見た。

それと同時に、ベルトは再度発光し、それと同調するかの様に俺のポケットが発光。

どうやら発光してるのは俺の携帯らしい。

俺は携帯を取り出した。

取り出した携帯は発光を続け、形状が変わって行った。

丁度、ベルトにフィットする感じだ。

また画面には、「開け」と、書いてあった。

俺は携帯を開いた。

すると、またもや画面に何かが書いてあった。

269押してENTER

画面にはそう書いてあった。

俺は試しに指示通りにボタンを押す。

携帯からは、

「standby」
スタンバイ

と、音声が出て、

閉じて差せ

と、画面に出た。

何だこれは？

まあ良い。取り敢えず差してみよう。

俺はベルトに携帯を差し込んだ。

「HENSHIN！」

と、携帯から音声。

その直後、ベルトからマスクドアーマーが形成され、俺の全身はアーマーに包まれた。

「warning！（ワーニング！）」

と、携帯からいきなり高い音の電子音が発せられた。

次の瞬間、クロンが俺に体当たりし、俺は数メートル程吹き飛んだ。どうやらクロンの接近を教えてくれていたらしいな。

「いってー！」

俺は叫び、

「ざけんじゃねえよ！」

と、クロンに体当たり。

しかし、クロンは猛スピード「ハイパークロックアップ」で避けた。

「何だよ今の！？」

俺は驚いていた。

こう早いとなると、倒すにも手間が掛かりそうだ。

俺はベルトから携帯を外して開いた。

画面には「98310ENTER||cast off」と表示されていた。

「何だか分かんねえけど、押してみるか！」

俺は画面に表示されてる98310を押し、ENTERを押す。
画面は差せと表示される。

俺はベルトに再び差した。

「cast off」

と、携帯から電子音が鳴り、アーマーが弾け飛ぶ。

「change SAMURAI（チェンジ、サムライ）」

と、再び携帯から電子音。

俺は自分の容姿を確認。

特に変わったところは何も無かった。

役立たずが！

俺は再び携帯を外し、開いて画面を確認。

画面には各種機能が表示されていた。

039ENTER||put on

969ENTER||clock up

96908ENTER||clock over

29ENTER||BUKI

俺は取り敢えず、BUKIと書いてあり、武器とも読めるものを選んだ。

29ENTERと、俺は押す。

すると携帯は、発光を初め、刀に変形する。

刀にはENTERのボタンだけが付いていた。

俺はENTERを押してみた。

「attack mode」

と、刀から電子音が鳴り、刀の刃が燃え出す。

「成る程。」

俺は燃えてる刀でクロンを攻撃。

クロンはドッカーンと音を立てて爆裂霧散していった。

「Time up」
タイムアップ

電子音が鳴り、刀は元の携帯に戻った。

俺は携帯の回線切断ボタンを押した。

すると変身が解け、ベルトが発光して体内に侵入して行った。
「何だったんだ？ 一体・・・。」

剣（ツルギ）（後書き）

完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8258a/>

仮面ライダー剣

2010年10月9日20時50分発行